



オランダ坂 (活水学院下の坂)

土木遺産の香 第88回

居留地の面影を今に伝える「オランダ坂」 長崎県長崎市



株式会社千代田コンサルタント/社会環境事業部
児島 正之 / KOJIMA Masayuki
(会誌編集専門委員)

一つではないオランダ坂

史的情緒ただよう長崎市東山手町に「オランダ坂」はある。JR長崎駅から南南東約2kmの路面電車の駅、「大浦海岸通」の近くだ。オランダ坂は、1864(元治元)年に完成し1899(明治32)年に条約改正で撤廃された外国人居留地(以降、居留地)一帯の坂道の呼称の一つではないらしい。中でも「活水学院下の坂」「活水坂」「誠孝院前の坂」は有名だ。なお、これらがどの坂を指すのかは諸説ある。

東山手町の「オランダ坂通り」に入ると眼前に石畳敷きの「オランダ坂」が現れる。道なりに石畳の坂を上り、分岐を左に活水学院の正門に向かうと「活水学院下の坂」と「活水坂」がある。沿道には東山手十二番館や東山手甲十三番館等の洋館があり、石垣や楠が多く居留地の歴史的景観が残る。ドラマや映画などに登場する有名な場所であろう。

先ほどの分岐を右へ緩やかな上り勾配から平坦な石畳をしばらく進むと急な下り坂「誠孝院前の坂」が現れる。この坂は、最も古いオランダ坂と言われている。この他にも「丸山オランダ坂」や「下り松オランダ坂」とかつて呼ばれた「グラバー通り」がある。これらの坂は、なぜオランダ坂と呼ばれるようになったのであろうか。そもそも長崎にはオランダ坂の他にも呼び名の付いた坂が数多くある。諸外国では、通りに名称を付ける習慣はあるが「坂」を特別視した名称は珍しい。

居留地の形成と石畳の始まり

我が国は1858(安政5)年に米、蘭、露、英、仏の5か国と修好通商条約を結んだ。その取り決めに従って翌年5月に「長崎、神奈川、箱館を開港して自由貿易を許可する旨」を布告し6月以降に開港してい



オランダ坂通り位置図(現地案内板より)

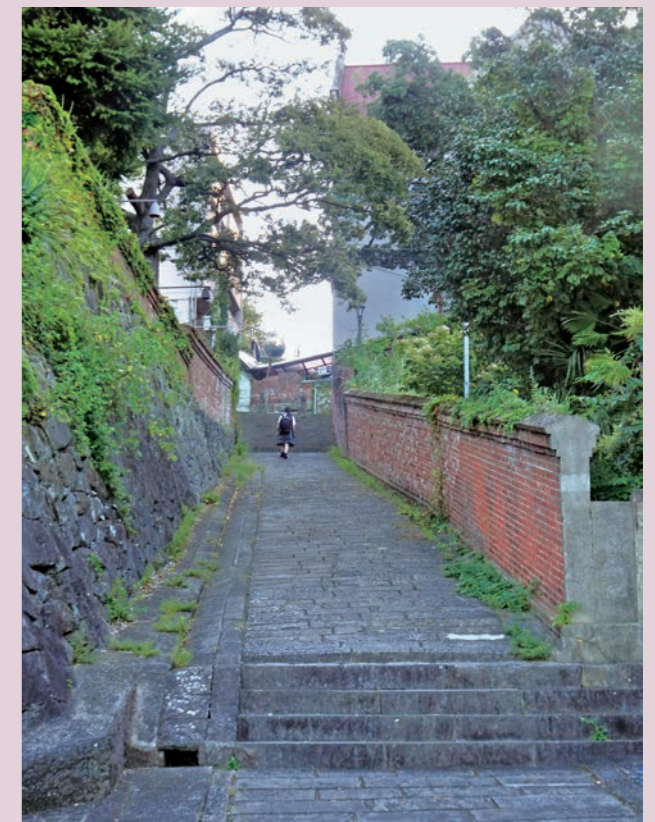
る。この時期から、居留地が拡大していった。

元々、長崎には1636(寛永13)年完成の居留地「出島」、1689(元禄元)年完成の中国人居留地「館内」があったが、条約締結後に、海岸を埋め立てた「大浦」「下り松・小曾根」「梅香崎」、その背後の丘陵地を造成した「東山手」「南山手」へと拡大していった。居留地は治外法権で外国人の自治領域であった。

オランダ坂のある東山手地区は1858年以前に造成された。1861(文久元)年の『居留地設定計画書』には「石橋から教会に至る緩やかな坂道を造り完全舗装することを決定した」と書かれている。教会に至る参道整備が石畳の始まりと言えそうだ。

石畳の技術的特徴

南山手や東山手の伝統的建造物群保存地区には、居留地時代の石畳が多く残っている。斜面の畑地を造成したもので、勾配のある石畳は途中が石段になっているものもある。オランダ坂周辺の石畳は、舗装道路として切り石を敷き詰める石畳の技術を今に伝えている。これらは東山手の造成期に造られたものだが石の違いや敷き方の違



活水坂

いから、後に修復・改変されたことが分かっている。

勾配のある石畳道脇には平石を2枚合わせてV字に組んだ「三角溝」と呼ばれる側溝や排水溝が併設され、流量や流速を調整するための工夫がなされて



誠孝院前の坂

いる。沿道の建築物が新しく建て替わった場合でも当時のものが使われ、今でも十分機能しているものが多い。

維持修繕は長崎県の中央地域センターにて行われており、史的な雰囲気を留める配慮がなされている。

オランダ坂の由来

オランダ坂と呼ばれる由来にも諸説ある。江戸時代、日本で唯一貿易が行われていた長崎では、オランダ商館が移った出島に住むオランダ人の影響から、開国後も東洋人以外の外国人を「オランダさん」と呼び、「オランダさんが通る坂」という意味で居留地の坂はすべてオランダ坂と呼んでいたと言われる。

1862(文久2)年には東山手町5丁目に日本初のプロテスタント教会、英国聖公会・会堂が建設され、そこに至る坂を多くの外国人が日曜ごとに行き交ったことから、オランダ坂と呼ばれるようになったという説もある。

その他に「丸山オランダ坂」に由来する2つの説がある。1つ目は鎖国時代、女性として出島への出入りを唯一許されていた丸山遊女たちが、そこへ向かう時に目立たないこの坂を通り、当時流れていた川から小舟を乗り継ぎ通ったという言い伝えから「阿蘭陀行き」、オランダ商館に出入りした丸山遊女が通った坂と呼ばれるようになったという説。もう1つは明治時代、丸山の上手となる現中小島公園付近にできた西洋料理店「福屋」に行くために、居留地に住む多くのオランダ人が丸山の花街を避けられるこの坂



東山手地区の三角溝

を頻繁に通ったという説である。

坂の役割

外国人が住んだ居留地には境界があり、長崎市街から居留地を隔離しようとする意図があったようだ。中国人居留地の広馬場の北側1ヶ所だけが長崎市街地に隣接している以外は①海と水路または川、



オランダ坂通り



東山手十二番館



長崎居留地の境界線(現地図を基に筆者作製)

②道路、③道路と石垣、④石垣、⑤自然の崖地の5つの境界があった。また居留地に通ずる道路に面して居留地を囲うように番所が10ヶ所設置され、ここからも居留地を隔離する意図が窺える。オランダ坂は、起点付近の石橋に番所が設置されていたことから、長崎市街地と居留地を隔離する道路による境界の一端を担っていたようだ。

一方、1859(安政6)年5月、長崎に赴任した初代駐日英国公使のラザフォード・オールコックが、海を一望できる東山手地区を散策しながら「素敵な場所であると感じた」という記録が残っている。治外法権であったことも手伝ってか居留地に眺めの良い立地を求めた外国人と、居留外国人を隔離したい日本政府の思惑が一致し、このことが居留地形成の過程でオランダ坂の構造や役割に少なからず影響したのではないだろうか。

そもそも日本では古来、坂は境界線の役割を果たす重要なものと捉え、親しみを込めて大切にする文化があった。『古事記』には「坂」の字が数十回登場する。意味するところは「境界」「通路」「要塞」「呪的な場」である。現世と来世の境目を「黄泉比良坂」と呼び、海神の国と人の国との境界を「海坂」とした記述も残っている。坂を大切に思う文化が親しみを込めて多くの坂に呼び名を付けさせたのだ

ろう。

三方を山に囲まれ坂の多い長崎では、急勾配等の構造的特徴や歴史由来の呼び名のある坂を観光資源として守り活かす取り組みがなされてきた。長崎市の公式観光サイトにも呼び名のある多くの坂が紹介されている。我が国古来の歴史や文化と地域の地道な取り組みとの繋がりに坂の呼び名を守り伝えるロマンを垣間見ることができる。

<参考資料>

- 1) 長崎市公式観光サイト travel nagasaki「オランダ坂」(<https://www.at-nagasaki.jp/spot/105>)
- 2) 教養セミナー「長崎坂物語」長崎大学工学部工学科構造工学コース クラスNo:35 指導教員:松田浩
- 3) オランダ坂周辺の石畳、石溝「長崎県の土木遺産リスト」一般社団法人九州地域づくり協会 (<http://dobokuisan.qscpuu2.com/search-list/03nagasaki/18oranda-sakasyuuhen/>)
- 4) 長崎外国人居留地における石畳道と側溝・排水溝の調査「土木史研究」1994年06月 岡林隆敏 長友正二郎
- 5) 長崎旧居留地の形成と変遷過程について「日本建築学会計画系論文報告集 第352号 昭和60年5月 宮本達夫 土田充義
- 6) 境界としての「坂」佛教学論文目録リポジトリ 京都語文 25, 197-209 後藤智香
- 7) 長崎の3つの「オランダ坂」長崎市東山手町・丸山町」(<https://misakimichi.com/archives/1616>)
- 8) 長崎「坂」ストーリー「長崎Webマガジン」(<http://www.city.nagasaki.lg.jp/nagazine/hakken0409/index.html>)

<取材協力・資料提供>

- 1) 長崎市土木部土木総務課
- 2) 東山手十二番館 (NPO法人長崎の風)

<写真提供>

- P38上、P39右上、P40右下写真:児島正之
P39下、P40左下写真:井村優花
P40上写真:寺本幸司